玉叡山西願寺阿弥陀堂附厨子、
麒麟山鳳来寺観音堂及び
観音堂ご詠歌についてのガイド

いちはら市民大学卒業生
「i・見たい・知りたい・伝え隊」活動報告

2019.1.22

この会は市原市市民大学卒業生による会員相互の交流を図り研鑽に努め、「歴史・観光」を通じて、生きがいを求めると共に、市原市市民大学で習得した知識を地域社会に活用することを目的として活動しています。

平成30年度は3班にグループ分けし、市内の歴史・観光についてテーマを設定し、現地調査・文献集めをし、現地で観光ガイドの研修を行いました。

今回、第1班が担当した「玉叡山西願寺阿弥陀堂附厨子、麒麟山鳳来寺観音堂及び観音堂ご詠歌についてのガイド」の研修内容について報告します。

尚、第2班は「幻の鶴舞藩」、第3班は「西広板羽目堰と諏訪神社」を担当しました。

第1班メンバー
北島紀男
喜安章幸
斉藤福次郎
小川千恵子

1. 歴史背景（西願寺＆鳳来寺の主城平蔵城について）

担当　北島紀男

いちはら大学・３期生ＯＢで結成した
ｉ-見たい・知りたい・伝え隊の１班４名でガイドします。

西願寺阿弥陀堂、鳳来寺観音堂をガイドしますが、どちらも国指定重要文化財です。　それぞれの担当は、
① 歴史背景・・・・・・北島紀男
② 西願寺阿弥陀堂・・・喜安章幸さん
③ 鳳来寺観音堂・・・・斎藤福次郎さん
④ 鳳来寺御詠歌・・・・小川千恵子さん　です。
御詠歌とは・・・仏教の教えを五・七・五・七・七の和歌と成し、
旋律＝曲に乗せて唱えるもの。
平安時代から伝わる宗教的伝統芸能の一つである。

＜歴史背景について＞
西願寺阿弥陀堂、鳳来寺観音堂ともに、室町時代に土地の豪族で平蔵城城主・土橋平蔵将経（つちはしへいぞう　まさつね）によって、建立されております。
西願寺阿弥陀堂は平蔵城鬼門守護のため、鳳来寺観音堂は吉沢城（きっさわ）鬼門守護のために、建立されたものです。
＜本城の平蔵城＞を守るため、尾根つづき北側に＜出城の城部田城＞があり、西側には＜支城の吉沢城＞がありました。

本城の平蔵城、支城の吉沢城、出城の城部田城で、やや離れた北側の鶴舞地区に池和田城があり、さらにその先の姉崎地区に椎津城がありました。
また、東側には真里谷城、大多喜城があったわけです。
平蔵城、吉沢城それぞれの城の造りは、平面図をご覧ください。

どの城も簡易な造りの城となっております。
石垣が造られたのは織田信長以降で、この頃は土塁で城を守っておりました。
参考として

郭とは・・・区画した区域の名称で、物見や攻撃を与える櫓が建てられる。
虎口とは・・郭の最も重要な入口。
砦とは・・・小規模の防御施設。
出城とは・・中規模の防御施設。
支城とは・・本城を守る補助的役割をする城。

平蔵城に関する文献が殆んどなく詳細は不明ですが、ある文献によりますと
平蔵城は大多喜城（城主・正木大膳）の支城であったようです。
正木大膳は、里見氏の重臣でしたが反旗をひるがえし、北条方へ組みした。
さらに、正木大膳は弟を勝浦城の城主にすえ、勢力を伸ばした。

また、城主の土橋平蔵についても詳細が不明で、何代も同名を受け継がれており、伝承では、初代は平将門と同時代（平安時代 939 年将門の乱）であり、平蔵城が廃城になったのが戦国時代の 1590 年、豊臣秀吉に北条氏が滅ばされ、関東が平定された頃です。

従いまして、＜平安時代 794～　＞＜鎌倉時代 1192～　＞＜室町時代 1338～　＞＜戦国時代 1540～　＞と、4 時代に渡る歴史背景を考察します！！！

① 奈良時代・・・
　その前に、武士の起こりの経緯ですが、
奈良時代の大化の改新（645 年）以後の公地公民が崩れ、墾田永年法が制定（743 年）され、自分で耕した土地なら、国のものではなく自分自身のものにできるようになった。　みんな必死で次々に新しい土地を開墾した。
しかしこの時代は、裁判所も弁護士も警察もいない。
自分のものにした土地も、力のない人たちは守ることができない。
そこで、土地や財産、家族の命を守るためのガードマンが、武士である。
武士というのは、初めは武装した農民であった。

② そして平安時代に入り、
武士も一人で戦うより大勢で戦ったほうが有利なので、武士が集まり組織を作る。これが武士団である。
小武士団同士が戦い、勝ったほうが相手を吸収してどんどん大きな武士団になってゆく。
そして最初に大武士団を作った「平将門」が、朝廷に対し反乱を起こす。
⇒　初代土橋平蔵の頃です。

その後、特に大きな武士団を形成したのが、＜桓武天皇の血を引く平氏＞と＜清和天皇の血を引く源氏＞である。

1156 年　保元の乱（×崇徳上皇（すとく）　ｖｓ　〇後白河天皇）
1159 年　平治の乱（×源義朝（よしとも）　ｖｓ　〇平清盛）
そして、この頃から房総の支配状況が一変します。

1180 年　源頼朝が挙兵後石橋山の合戦で敗れ、伊豆から安房国へ逃れてくる。　この頃の房総は、安房国＋上総国＋下総国に分かれており、それぞれの支配者は、安房は 4 豪族、上総は上総介平常、下総は千葉常胤が支配していた。
源頼朝は、安房国 4 豪族、上総、下総を配し、房総を統制する。
その後、平氏を滅ぼし幕府を設立する。

③ 鎌倉時代
1192 年　鎌倉幕府設立

④ 室町時代
1338 年　足利尊氏によって室町幕府が開かれるが、
（後醍醐天皇）と（光明天皇＋足利尊氏）間で 60 年間（1392 年まで）、南北朝時代が続く。
再び安房国も乱れ、4 豪族支配へ戻る

1441 年　里見義実（よしざね）が、上野国碓氷郡（こうずけこく　うすいぐん）から安房国へ入国＝房総里見氏の発足＝安房国を支配
⇒　土橋平蔵将経（まさつね）の頃です。
但し、上総国は
里見氏、上杉謙信・武田信玄・北条氏綱が争奪戦を繰り広げたが、里見は上杉と同盟を結ぶ。　その後、上杉景勝に代替わりし、豊臣秀吉の配下となったので、里見も追従して豊臣秀吉の配下となる。
（下総国は、千葉市がしっかりと支配していて盤石）
1467 年　応仁の乱
8 代将軍足利義政の後継将軍をめぐり、
東軍：弟の足利義視（よしみ）、細川勝元
西軍：息子足利義尚（よしひさ）＋妻日野富子、山名宗全が戦う。
11 年間も続いたが勝敗つかず、細川勝元、山名宗全の死去で終了

となる。　（９代将軍は足利義尚・・・しかし、１５歳で死去）
これにより室町幕府の権力が低下し、戦国時代へ突入する。

戦国時代とは、この応仁の乱～織田信長が上洛するまでの、
１００年間と考えるのが一般的である。

⑤ 戦国時代

1538 年　第一次国府台合戦
＜関東足利氏の正当性をめぐっての戦い＞
小弓公方足利義明ｖｓ北条氏綱（古川公方足利晴氏の依頼）の
決戦で、小弓公方足利義明が討ち死に。
敗れた小弓勢は房総へ落ちてゆき、里見氏を頼った。

1564 年　第二次国府台合戦
＜上総国の勢力争い＞
里見氏 16000 騎　ｖｓ　北条氏 20000 騎　の直接対決。
又、両者は里見水軍と北条水軍で、海上勢力でも対立していた。
少数兵ながら兵術を尽くし里見軍が大勝利し、この夜酒を酌み
交わし、休息。
しかし、この情報を得た北条軍が、翌朝二手に分かれて攻撃。
里見軍はさんざんに敗れた。

＊＊北条軍は勢いにのり、椎津城、池和田城、久留里城、大多喜城を
攻め落とし、上総の大部分を手中に収めた。

1590 年　豊臣秀吉による小田原攻め。
豊臣方 20 万　ｖｓ　北条方 3 万 4 千・・・北条氏が滅亡する。
4 代北条氏政、氏照兄弟切腹。　5 代北条氏直高野山へ追放。

豊臣郡に攻められた房総の北条系の城は、小田原へ兵力を出陣して
おり、少数の守りで殆んど抵抗できずに、次々と落城する。
椎津城、池和田城、平蔵城、大多喜城、本佐倉城ｅｔｃ。
本佐倉城の千葉氏も滅亡する。

北条氏は、5 代 75 年で滅亡。
千葉氏は、25 代 400 年にわたり房総で名を馳せたが滅亡。

＊＊＊房総を含む関東は、豊臣秀吉の命により、徳川家康が支配。

里見氏は存続するが、２代将軍徳川秀忠に国替えされ、鳥取倉吉で滅亡

里見氏・・・源氏の流れ
安房里見氏・・・９代 170 年間安房国を治めた。　（初代　里見義実）
（1441+170=1611 年）　（９代　里見忠義）

⑥ 戦国時代に山間部に人が集まっていた理由！！！

戦国時代以前は「コメ」が最重要であった。　米を作るためには水は欠かせない。　この頃の水田への引水は、すべて山からの水のみであった。

引水には川の水を利用するのが最も有効であるが、川からの水を水田へ引き込む為には、川に“せき”造り、水位を上げなければ水は田に引けない。
ところが、“せき”を造る技術は、江戸時代以降になってから伝えられた技術である。

その為各地の豪族は、山間に城を築き、農民を保護してコメを作らせた。
従って、この頃は山間部に人が集まって暮らしていたわけである。

現在は平野地が開発され人口が増加しているが、
技術革新によって、人口の集落地が変わるわけですね！！

⑦ 最後に、房総の名の由来について
「総」とは、良質の麻がとれた地区の意味を表わしていたようです。
そして、安房国の「房」と上総、下総の「総」を合わせて、
房総と呼ばれるようになったようです。

以上で、歴史背景についてのガイドを終了させていただきます。
引き続きまして、
喜安さんの西願寺阿弥陀堂のガイドとなります。

２．玉叡山西願寺阿弥陀堂附厨子

担当　喜安章幸

西願寺阿弥陀堂の建物の特徴について主にご説明します。
（①②③・・・・の現場は解説の項を参照）

西願寺の建立

玉叡山西願寺は、明応 4 年（1495　室町後期）時の平蔵城主　「土橋平蔵政常（将監、將常、將経）」が、城の表鬼門守護のため「七堂伽藍」①を建立し、行基作の「阿弥陀如来」を安置した天台宗の寺でありました。

阿弥陀堂は寺中の仏堂の一つであって、同じく寺中に建てられた熊野三社の神体及び神社も現存しています。

平蔵城の歴史

承平年間（931-938　平安時代）に、紀州の土橋平蔵政常が築城と「里伝」にあるが、築城年代を明らかにする文献はありません。

当時の日本の国情は

中央政府が地方の政治をコントロール出来ない状況にあった。

承平・天慶（しょうへい・てんきょう）の乱

承平 5 年（935）から天慶 4 年（941）関東における平将門（？－940）の乱と西国における藤原純友（？―941）の乱に象徴される。武士の勢力が初めて歴史上に姿を現した頃でもある。

城とお堂の位置関係　②

西願寺阿弥陀堂と平蔵城、鳳来寺観音堂と吉沢城（きっさわじょう）。又、最後の平蔵城主　土橋平蔵忠吉が自刃した長南町蔵持の位置を示す。阿弥陀堂から見ると、平蔵城は南の方角の山になる。

西願寺阿弥陀堂は

阿弥陀堂と内部の厨子は、共に国指定重要文化財であって、基本的には「禅宗様」の造りであるが、部分的に和様も取り入れられている。

寺院の建築様式には、次の 3 種類があります。

「和様」　　平安時代以降、日本独自の形態として発展。

室生寺五重塔、延暦寺根本中堂など

「大仏様」　鎌倉時代、東大寺再興の際に用いられた様式。大きいが故に構造に重点をおき、装飾はあまりない。そのため日本の感覚に相容れないとされ、すぐに衰退。

東大寺南大門、大仏殿など

「禅宗様」　鎌倉時代、禅宗が入ってきて、広まった。

円覚寺舎利殿、正福寺地蔵堂など

禅宗様は、鎌倉時代初期から禅宗寺院で取り入れられ始め、武士の帰依を受けたことで 13 世紀後半から盛んになった様式である。

この堂は、鎌倉の「円覚寺舎利殿」③ によく似た仏堂と言われるが、大工が飛騨の匠の流れをくむ鎌倉の名工「左衛門三郎」と「九郎二郎」の二人であることと繋がりがあるのかもしれません。

西願寺は寛政年間（1789-1801　江戸中期）に火災にあい、奇跡的に阿弥陀堂だけが免れた。　昭和２－３年に解体修理され、以降屋根の葺き替えなどを経て現在に至っている。

千葉県下では、禅宗様建築の中で最も本格的なものである。

建物の特徴

・茅葺き寄棟造りの三間堂（柱が 4 本）。

・平面正方形で堂内は間仕切りのない「一室堂」である。

・垂木は、配列が並行ではなく、扇子の骨の様に放射状に配列された二段構えの「扇垂木（おおぎたるき）」④で、軒が大きく張り出している。そのため屋根のそりが大きく美しい姿になっている。

・組物は柱と柱の間にも入れる詰組「三手先詰組（みてさきつめぐみ）」④を用い、大きく張り出した垂木を支えている。和様では組物は柱の上だけで、柱の間には「束（つか）」とか「蟇股（かえるまた）」⑤と呼ばれるものを置いている。しかも三手先は用いられなくなっている。

・柱は丸柱（角はない）で、上部を僅かに削ってすぼませる「粽（ちまき）」⑥である。下部も削っている寺院もある。

・「貫（ぬき）」⑦を使って構造を強化しているため、柱の太さは和様に比べ

て細くすることが可能となった。　縁の下を見ると柱と貫の構造がよくわかる。禅宗様では和様の「長押（なげし：柱を表裏 2 枚の板で挟んで釘で止める）」④は用いないが、ここでは長押も用いられている。

・柱の上部同士をつなぐ「頭貫（かしらぬき）」④が、柱から突き出した先端を「木鼻（きばな）」⑧と言う。この部分は建物の構造上はなくてよいものであるが、彫刻を施し装飾としている。初期の頃は、ここのように素朴であったものが、時代を経てこのような華やかな木鼻⑨へと変化していっている。

・頭貫の上には、厚板の水平材「台輪（だいわ）」④が載り、その台輪に詰組の組物を設置して軸組を堅固なものにしている。

・堂本体は「高床式」になっており、周囲の「縁側」と共に和様を取り入れたもので、縁側の板の配列は⑩のようになっている。　　禅宗様では円覚寺舎利殿④のように縁側はなく、内も外も直接土間になっている。

・開口部⑪は、正面中央が「両開き桟唐戸（さんからど）」、その両端と両側面の第一、第二間が「引違い舞良戸（まいらど）」、背面中央が「片引板戸」、壁はすべて「胴縁三段入り竪板壁」である。　禅宗様では土壁造りはほとんどない。

・この阿弥陀堂には窓はないが、禅宗様には「火灯窓（花頭窓）（かとうまど）」⑫と言い、上枠を火炎形（火灯曲線）または、花形（花頭曲線）に造った特殊な窓がある。円覚寺舎利殿④ではこのような窓になる。
このデザインの良さから、安土桃山以降、他の宗派の寺院、神社、城郭などにも採用されてきた。

・禅宗様では建物の外側は彩色をしない「素木造（しらきづくり）」で、内側は彩色したり、絵を描いたりすることがある。この堂では、建物自体は内外とも素木造りである。

<u>堂の内部に入ると</u>、

・建物は和様の高床式なので「床」があり板張りである。板の並びは⑬のように、前部に長尺の板、後部に短尺の板を配置している。

・「来迎柱（らいごうばしら）」と「内陣柱」の 4 本の柱の内側に「内陣」を造る。平面図⑭で見るとこのような位置関係になり、三方開放である。　床下を見ると中ほどに来迎柱と内陣柱を確認できる。

・背面の来迎壁の前に「須弥壇（しゅみだん）」を置き、その上に「厨子（ずし）」を安置している。　阿弥陀如来は厨子の中に祀られている。　正面の立面図、側面の立面図⑮を見ると位置がよくわかる。

・厨子⑯も堂の様式と同じ円柱上下粽、三手先詰組、二重扇垂木。屋根は「入母屋造本瓦形板葺（いりもやづくりほんかわらがいたぶき）」で、創建当時の貴重なものである。

・西願寺の略縁起（火災に遭ったのによく残っていたものだ）によると、内陣の柱や組物には、朱色、金箔、極彩色とある。光輝いていたので別名「光堂（ひかりどう）」とも呼ばれた。　しかし、昭和 42 年の修理工事報告書には、内外とも素木造、須弥壇は 漆塗、厨子組物に彩色あり　とのみ。長年風雨に晒されていたので脱落したのでしょう。

・七堂伽藍の建立や金箔、漆を使っていたということは、当時の平蔵城が財政的に豊かであったし（潤沢な資金の出どころは？）、城主の熱烈な帰依もあったのでしょう。

・堂の屋根裏は、内陣の上に小さい方形の「鏡天井（かがみてんじょう：白木の天井板を平面にならべて張り，　格縁などの装飾的な部材をいっさいもたない簡素な天井）」があるだけで、全面に天井はなく、扇垂木や複雑な梁構造を露出させた「化粧屋根裏」⑰である。

最後の平蔵城主　土橋平蔵忠吉は、小田原北条氏の麾下に属していたため、天正 18 年（1590）豊臣方に攻撃され、長南町蔵持②の平蔵谷（へいぞうやつ）に逃れ、その地で自刃した。　後の人が石塔を建立し、その石塔は現在阿弥陀堂前庭隅に移されているとされるが、どれが該当するのか文字の判別もつかず不明。戦国時代に土橋氏は滅亡した。

解説

①　七堂伽藍の構成

三門（さんもん）：伽藍の正門
仏殿（ぶつでん）：伽藍の中心。本尊を配置し、礼拝の場
法堂（はっとう）：僧に教えを説き、指導する場
浴堂（よくどう）：浴室
東司（とうす）　：トイレ
僧堂（そうどう）：僧が座禅修行する根本道場
庫裏（くり）　　：寺務所 兼 台所

②　城とお堂の位置関係

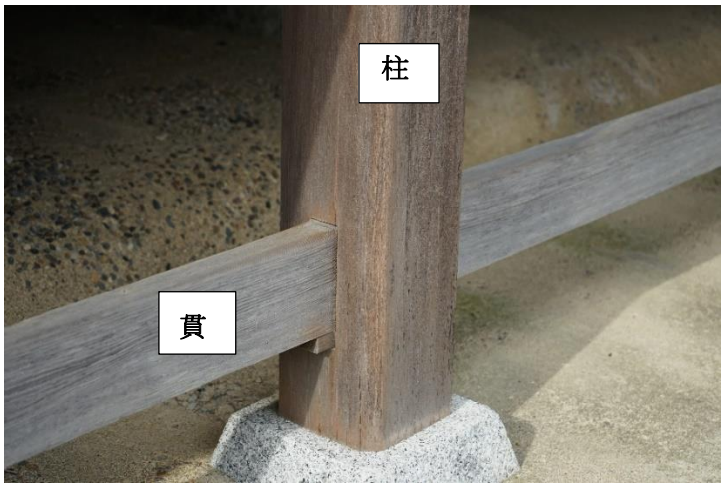
③　円覚寺舎利殿

④ 扇垂木、三手先詰組、頭貫、長押、台輪

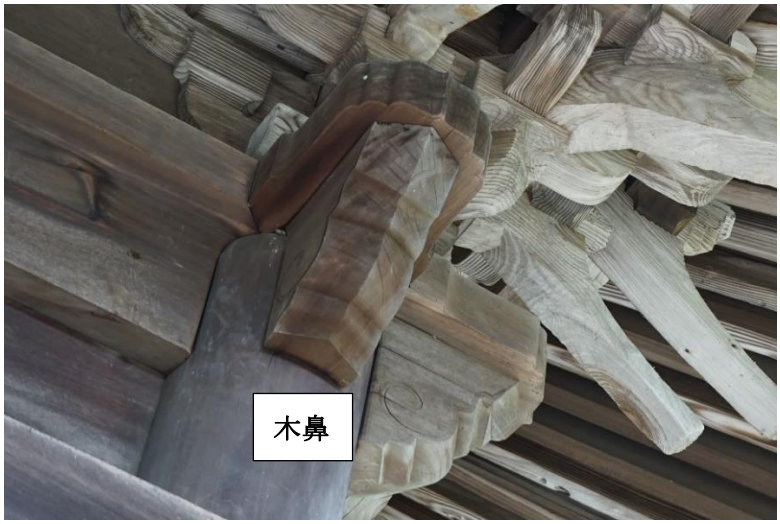
⑤ 和様の束（左）、蟇股（右）

⑥　粽　（柱の先端を僅かに削り、すぼめてある）

⑦　貫の仕組み（柱を貫通している）

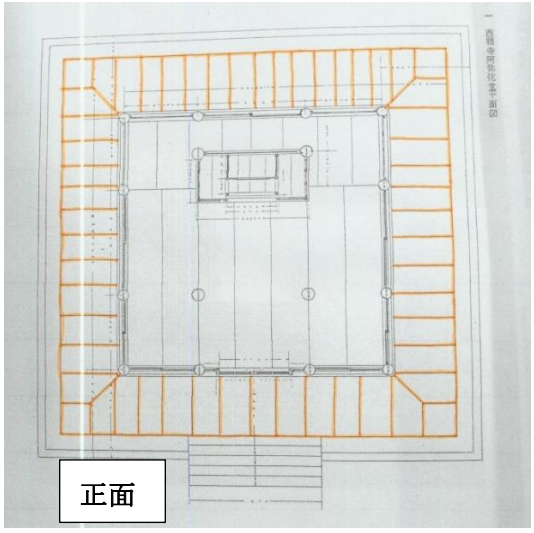


⑧　阿弥陀堂の木鼻



⑨ 後世の木鼻の例（より装飾的）

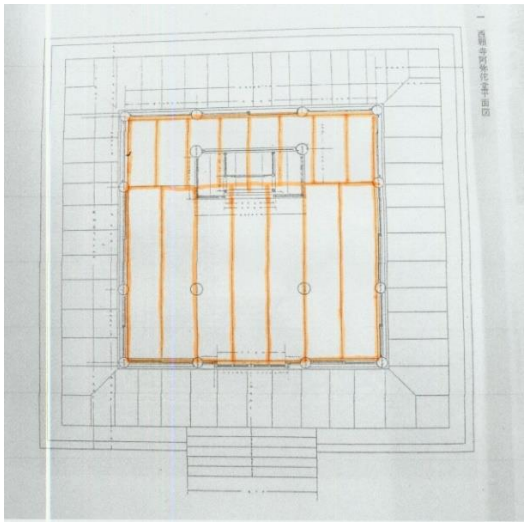
⑩ 縁側の平面図（橙色部分）



⑪ 正面の開口部　　中央が両開き「桟唐戸」、両サイドが引違い「舞良戸」

⑫ 火灯窓（花頭窓）の例

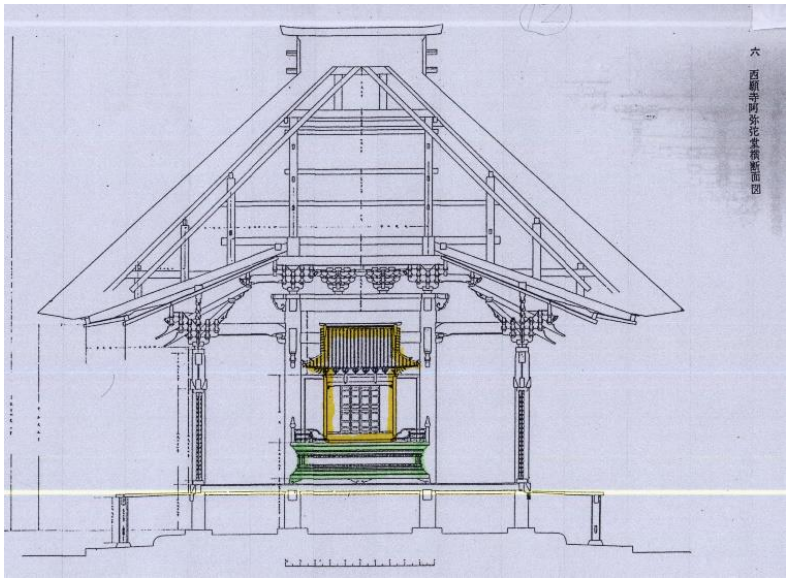
⑬　堂内板張りの床（橙色部分）



⑭　来迎柱と内陣柱及び須弥壇と厨子の配置

緑；須弥壇、黄：厨子

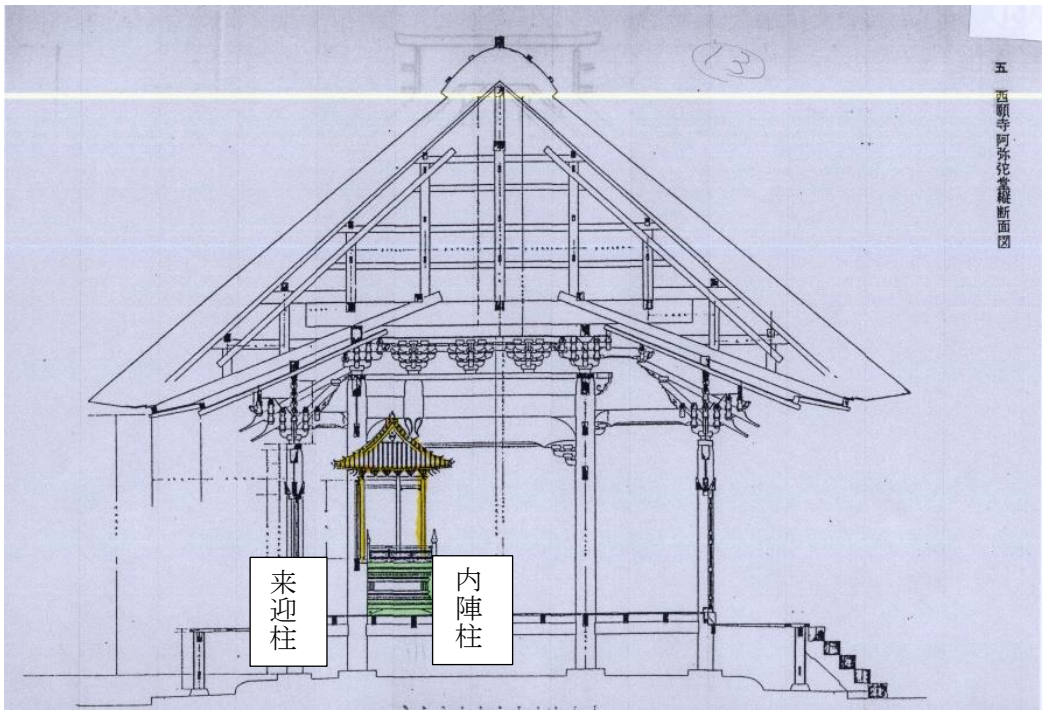
⑮　阿弥陀堂　横断面図



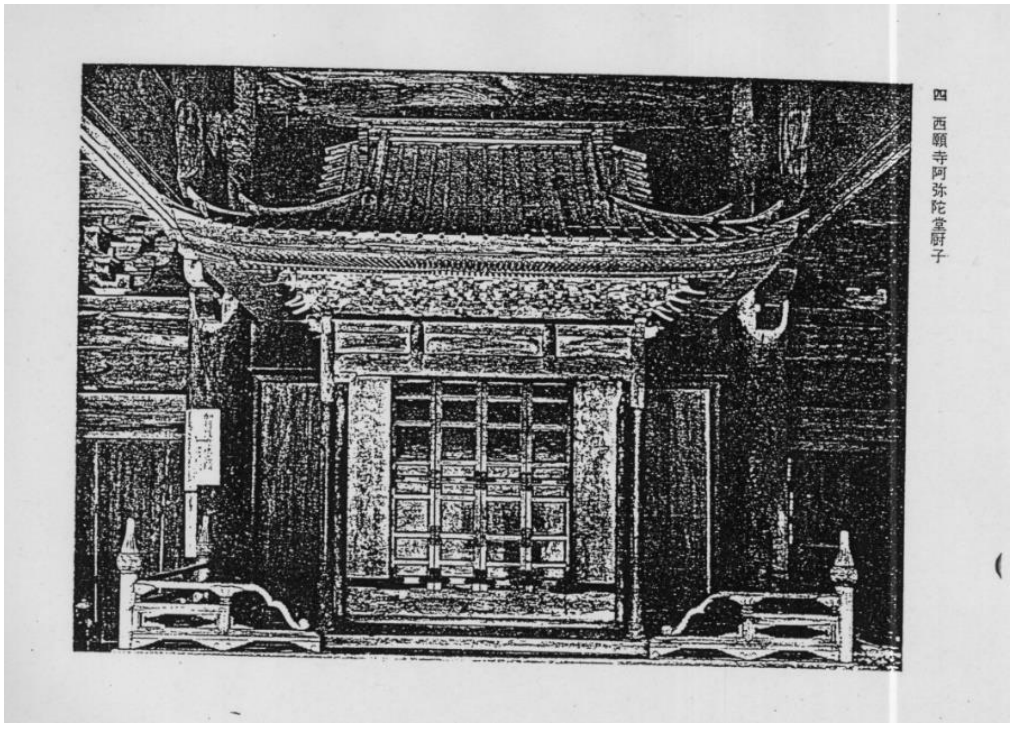
緑：須弥壇、黄：厨子

中央二本が内陣柱と来迎柱の重なり

縦断面図

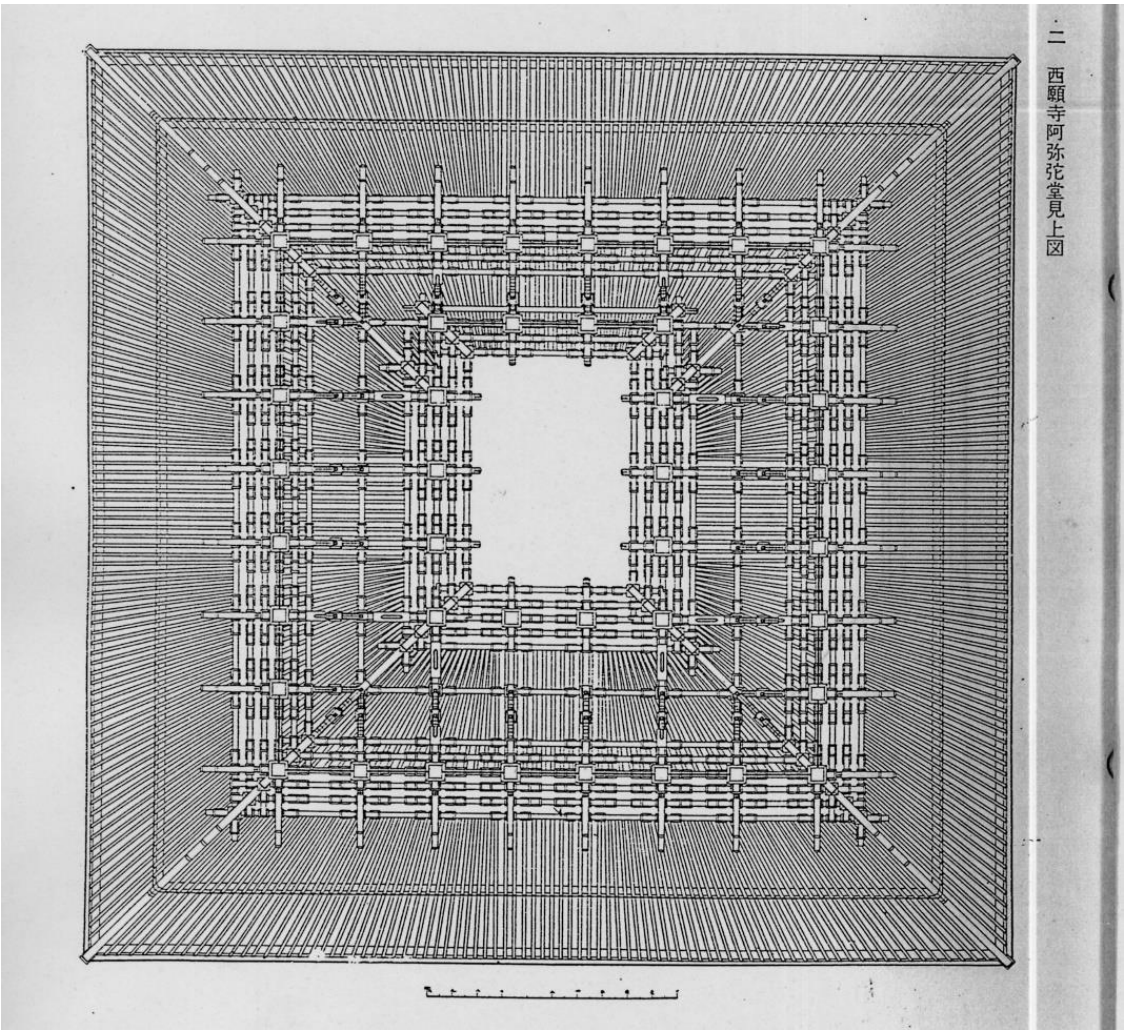


⑯　厨子



阿弥陀如来はこの中に祀られている

⑰　化粧屋根裏　（中央の白抜き部分が鏡天井）



参考文献

・昭和 42 年西願寺阿弥陀堂修理工事報告書　　市役所ふるさと文化課
・市原市史　別巻.　　市教育委員会
・市原地方史研究第 14 号　　市教育委員会
・稿本　市原市歴史年表　　市教育委員会
・市原の城　　小高春雄　　(株)正文社
・日本城郭大系　第 6 巻　　㈱新人物往来社
・市原郡教育会編纂　市原郡誌
・房総の古城.址めぐり　　府馬清　　有峰書店新社

3. 麒麟山鳳来寺観音堂

担当　斉藤福次郎

平蔵城から一尾根超えた所にある鳳来寺観音堂です。
これも西願寺阿弥陀堂と同じく国の重要文化財です。西願寺阿弥陀堂と同じ時代の作りで作り方もそっくりです。組建て方も全く同じです。だだ、こちらの方は少し西願寺阿弥陀堂に遠慮してるようです。平蔵城を守る為の吉沢城だからでしょう。

このお堂は平蔵城を守護する為に、城の裏鬼門に当たる場所の善福寺境内の南に建てました。(市原市教育委員会の現地案内板には、吉沢城の守護の為建立したと記載しています。私も観音堂の向きからして、この説が正しいと思います。)

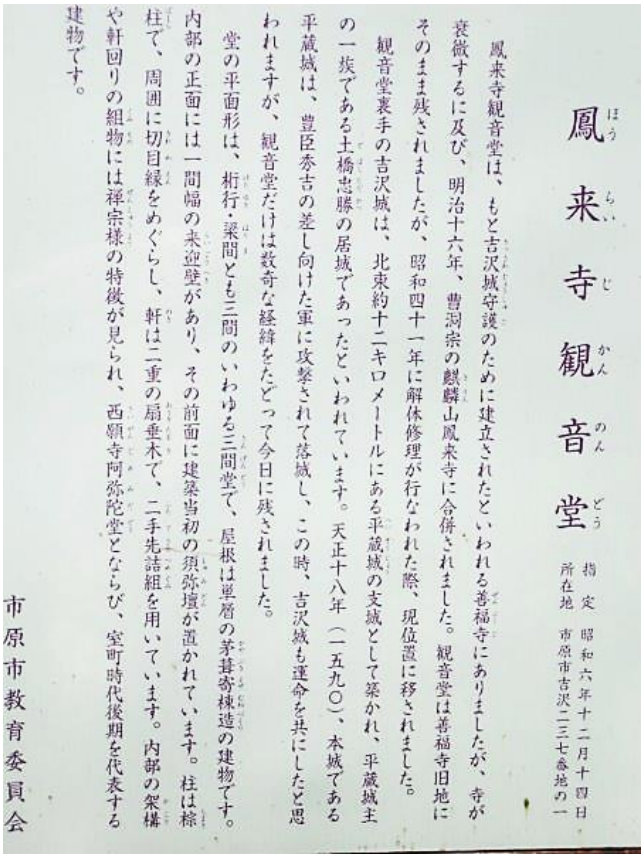
その礎石は善福寺跡地に在ります。寺が衰退した為、明治１６年曹洞宗の麒麟山鳳来寺に併合されました。風雨に曝されたまま観音堂は善福寺跡地に残されていましたが、昭和４１年に解体修理が行われた際に、現位置に移されました。

正面は三間の三間堂です。西願寺と少し違うのは、こちらの軒は先ほど説明しましたが、二重の扇垂木で、二先詰組を用いています。阿弥陀堂と同じく室町時代の代表的な建物です。縁側の切目縁の所の柱がギザギザに切りこみが在りますが、今の位置に移される時の御堂の状態が非常に悪いため、補修した後です。移築される前の御堂の向きは、正面扉は南向きでしたが、今は西向きになっています。

檀家総代さんのお話ですが、以前は左右正面の壁、扉は無く風雨に曝されて居たそうです。子供たちはその御堂の中で遊んでいたそうです。重要文化財の中で。

鳳来寺観音堂入口

立て看板の説明



鳳来寺観音堂

指定　昭和六年十二月十四日
所在地　市原市吉沢二三七番地の一

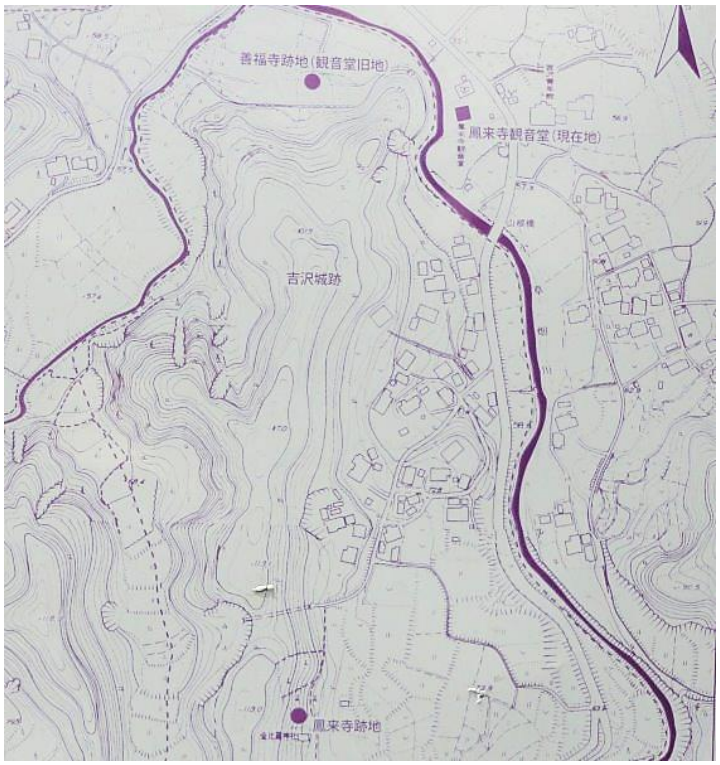
鳳来寺観音堂は、もと吉沢城守護のために建立されたといわれる善福寺にありましたが、寺が衰微するに及び、明治十六年、曹洞宗の麒麟山鳳来寺に合併されました。観音堂は善福寺旧地にそのまま残されましたが、昭和四十一年に解体修理が行なわれた際、現位置に移されました。

観音堂裏手の吉沢城は、北東約十二キロメートルにある平蔵城の支城として築かれ、平蔵城主の一族である土橋忠勝の居城であったといわれています。天正十八年（一五九〇）、本城である平蔵城は、豊臣秀吉の差し向けた軍に攻撃されて落城し、この時、吉沢城も運命を共にしたと思われますが、観音堂だけは数奇な経緯をたどって今日に残されました。

堂の平面形は、桁行・梁間とも三間のいわゆる三間堂で、屋根は単層の茅葺寄棟造の建物です。内部の正面には一間幅の来迎壁があり、その前面に建築当初の須弥壇が置かれています。柱は椋柱で、周囲に切目縁をめぐらし、軒は二重の扇垂木で、二手先詰組を用いています。内部の架構や軒回りの組物には禅宗様の特徴が見られ、西願寺阿弥陀堂とならび、室町時代後期を代表する建物です。

市原市教育委員会

鳳来寺、善福寺、吉沢城の位置関係

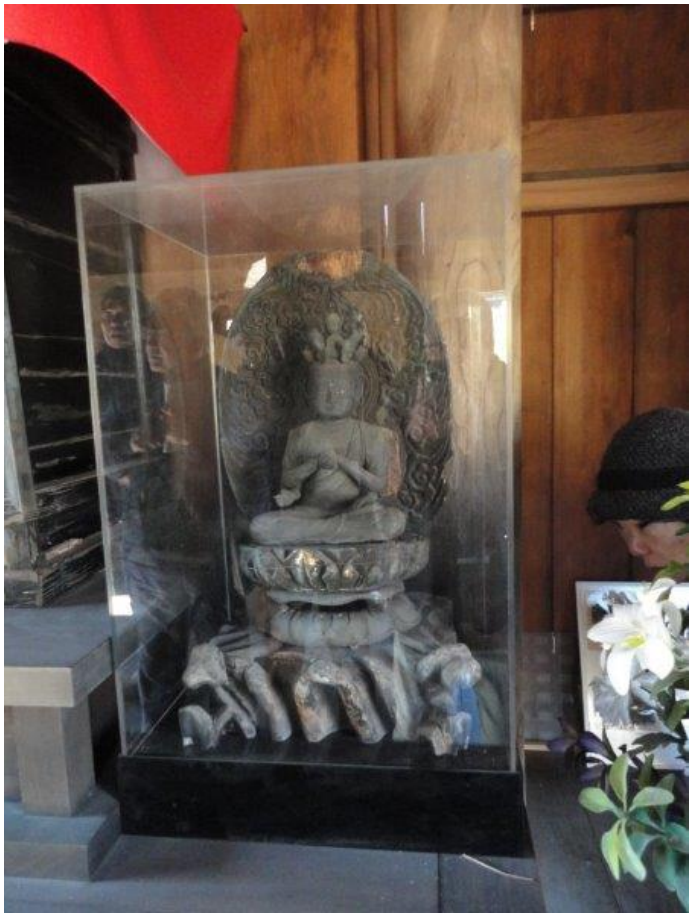


ご詠歌の額

移築時の柱の修理跡（柱のギザギザ部分）

平成 29 年　構造補強工事（床下の黒い部材）

本来の観音座像



内殿の柱組

鏡天井

移築前の観音堂の礎石

観音堂の８個の全体礎石

4.　鳳来寺観音堂のご詠歌について

担当　小川千恵子

１．鳳来寺観音堂のご詠歌

鳳来寺観音堂は、西国五番札所河内の国の「紫雲山葛井寺（ふじいでら）」の分身だと言い伝えられ、ご本尊、ご詠歌も葛井寺のものと同じです。

ご詠歌とは、仏教の教えを五・七・五・七・七の和歌と成し、旋律=曲に乗せて唱えるもの。日本仏教において平安時代より伝わる宗教的伝統芸能の一つである。五七調あるいは七五調の詞に曲をつけたものを「和讃」と呼び、広い意味では両者を併せて「ご詠歌」として扱われています。

２．西国五番の寫

花山法皇が葛井寺を巡礼した際に詠まれた歌

まいるより
　　頼みをかくる葛井寺
花のうてなに
　　むらさきの雲

ご詠歌の意味は

葛井寺のご本尊は、霊験あらたかで、たび重ねてお参りすると願いが通じ、御利益があると伝えられています。

特に、藤の花の季節に訪れ、境内にある藤の花を見上げると、その素晴らしい花は、さながら紫色の雲のようで、高貴な気分になりありがたさを感じます。

３．葛井寺について

西国五番札所　紫雲山葛井寺
宗派　　真言宗 御室派（おむろは）
本尊　　十一面千手千眼観音菩薩(座像)
開基　　行基上人
建立　　神亀二年（725 年）
　　（しんき）：聖武天皇の時の年号
所在　　大阪府藤井寺市藤井寺 1-16-21

４．花山法皇とは

平安時代中期第 65 代の女性天皇
(在位) 984 年 9 月 (17 歳) ～986 年 8 月　出家後花山法皇となり仏門に入る。
法皇になった後は、「西国三十三所」を巡礼しながら各霊場で詩を詠まれ、これらが「ご詠歌」として詠われています。

生まれ持った芸術的才能

花山法皇は短い生涯の中で、芸術面での才能を発揮されていた事でも有名です。 絵画・建築・和歌などの多くの分野にわたり、中でも和歌について在位中の 985 年、986 年に内裏で歌合せをして、和歌の作者を左右に分けて歌を詠み、その勝敗を競う催しを主催するほどの入れ込みようでした。

自ら「拾遺和歌集」（3 番目の勅撰和歌集）を親撰し、「拾遺抄」を増補したともいわれる。また、天皇などの命により歌集を編纂（へんさん）することにも関与していました。

５．花山法皇の霊所巡拝の姿

花山法皇は十一面観音様を入れた笈（おい）を背負って道なき道を巡礼され、従者もそれぞれ観音様を背負って同行されたそうです。

笈とは： 仏像，仏具，経巻，衣類などを入れて背負う足のついた箱で、箱笈と板笈の 2 種がある。

６．西国三十三所巡礼

花山法皇は、紀伊の国（現在の和歌山県全域から三重県南部の地域）熊野から「三十三ヶ所の観音霊場」を巡礼・修行するように信者を導いていましたので、　西国三十三所巡礼として巡礼者に継承されるようになりました。この時に各霊場で詠った和歌を、寺を巡拝する人達がその土地の仏を称え、節をつけて巡礼歌としたのが「ご詠歌」の起源とされています。

各霊場の観音菩薩を巡礼参拝すると、現世で犯したあらゆる罪業が消滅し、極楽往生できるとされる。

令和元年に日本遺産に認定された。

７．ご詠歌は歌い継がれる

人々の中で字も読めない、書けない人達が、自身の事、家族の事、友達の事などを思い、信仰心をもってお寺にお参りをしていました。ろうそくの光の薄暗い中で耳に聞こえるリン、鈴の音だけをたよりに詠まれた詩に、曲がつき歌われるようになり、 現在も信者・巡礼者によって歌い継がれています。

８．ご詠歌は宗派により異なる

宗派 ⇒ 真言宗・浄土宗・曹洞宗・臨済宗

	宗派	御　詠　歌
高野山金剛峯寺	真言宗	金剛流
成田山新勝寺	真言宗	智山派の蜜厳流（みつごんりゅう）
麒麟山鳳来寺	曹洞宗	梅花流
	特定宗派	詠歌流

９．鳳来寺観音堂 梅花流のご詠歌

人は誰しも幸せを願っています。しかし、悲しみ、苦しみを体験しない人はいないでしょう。そうした時に心を支えてくれるのが梅花流賛歌です。その歌詞には、私たちを安らぎの世界へと導いてくださる仏様の教え、想いが示されています。

鳳来寺観音堂のご詠歌は 100 以上もあり、お葬式、お祝い、その他、行事が有るごとにそれぞれ歌が変わり、称えられています。

これで 鳳来寺観音堂のご詠歌についてのガイドを終わります。
ご清聴ありがとうございました。